

日本分類学会連合ニュースレター

*News Letter published by the Union of
Japanese Societies for Systematic Biology*

No.7 [2005年6月8日]

連載「連合加盟学会の活動紹介」

日本鞘翅学会

高桑正敏 (日本鞘翅学会会長)

野村周平 (日本鞘翅学会庶務幹事・自然保護委員長)

【目的と概要】

日本鞘翅学会は昆虫綱、コウチュウ目に属する昆虫、つまり甲虫のなかまを研究する人たちの集まりです。甲虫とは前ばねが革のようにかたく、貝殻のような形をしており、背中の上で左右が合わさっている昆虫のなかまです。カブトムシ、クワガタムシ、コガネムシ、オサムシ、ゲンゴロウ、ホタル、テントウムシ、カミキリムシ、ハムシ、ゾウムシなども甲虫です。甲虫は日本に約1万種、世界に約30万種以上が知られる大変大きな昆虫のグループで、その上にまだ何十万種もの名前がついていない種があります。

日本鞘翅学会は1989年、日本鞘翅目学会と甲虫談話会が合併して発足しました。事務局を東京都新宿区百人町にある国立科学博物館分館に置き、研究発表会(大会、例会)や、採集会、会誌(英文誌、和文誌)の発行などの活動を行っています。会員数は数年前から600名前後で推移しています。1999年に日本学術会議加盟の学術団体として認定されました(学会ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/jsc2/>)。

【沿革】

本学会は、甲虫談話会と日本鞘翅目学会とが1989年に合併して創設されました。

甲虫談話会は1954年1月に世話人、黒沢良彦(代表)ならびに大野正男によって創設され、事務局を東京都台東区上野公園の国立科学博物館動物学科においていました。創設時の会員は56名で、年数回ほど国立科学博物館にて談話会を開催していました。1968年2月に「甲虫ニュース」発行し、日本鞘翅学会に引き継がれて現在に至っています。また、1976年12月から日本産甲虫目録第1~6集(1-30号)を発行しました。

また、日本鞘翅目学会は1973年4月に創設され、初代の会長を草間慶一、副会長を衣笠恵二、名古屋支部長を穂積俊文がつとめました。1976年6月の会員数は245名に上っています。事務局は東京都台東区東上野の福田惣一方におき、同年、第1会誌「Elytra」を発行しました。これは日本鞘翅学会に引き継がれ、現在に至っています。1975年に第2会誌「さやばね」を発行、本誌は11号(1986年)まで続けました。1984年には学会編として「日本産カミキリ大図鑑」を講談社より発行し、これは最近になって複製されています。

1989年3月、この両団体が合併し、日本鞘翅学会を旗揚げしました。設立大会は上野俊一を設立委員長として、3月26日に東京都港区虎ノ門の国立教育会館で行われました。発足当時の事務局は東京都新宿区百人町の国立科学博物館分館動物研究部昆虫第1研究室で

ありましたが、後に第2研究室(住所は同じ)に移りました。1999年には日本学術会議の学術研究団体として登録されました。

【構成】

(1) 事務局・各種連絡先

事務局・入会問合せ先・住所変更連絡先・退会届先・Elytra 投稿先: 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1, 国立科学博物館分館 動物研究部昆虫第二研究室

甲虫ニュース投稿先: 〒156-0053 東京都世田谷区桜3-14-13 鈴木互

大会・例会問合せ先: 〒259-1217 平塚市長持239-11 高橋和弘

(旧)日本鞘翅目学会・(旧)甲虫談話会・日本鞘翅学会の刊行物バックナンバー取扱い: 〒103-0023 東京都中央区日本橋本町3-5-11 共同ビル(本町通り) 株式会社川茂内 昆虫文献 六本脚 (Tel. 03-3279-2671; Fax. 03-3279-2678; roppon-ashi@kawa-mo.co.jp)

(2) 会員数(2004年11月18日現在)

名誉会員: 1名

賛助会員: 6名

一般会員(国内): 621名

一般会員(海外): 15名

合計: 642名

(3) 役員(第9期: 2005年1月~2006年12月)

会長: 高桑正敏(神奈川県立生命の星・地球博物館学芸員)

副会長: 新里達也(株式会社環境指標生物)

常任幹事: 渡辺泰明・野村周平・岸本年郎(以上: 総務・庶務担当)・斉藤明子(会計担当)・新里達也(編集担当)・上野俊一(英文誌編集長)・鈴木互(和文誌編集長)・大林延夫(渉外担当)・高橋和弘・露木繁雄(以上: 企画担当)

非常任幹事: 安藤清志・荒谷邦雄・大原昌宏・今坂正一・林靖彦・小島弘昭・大木裕・斉藤秀生・酒井雅博・岩田隆太郎・初宿成彦

会計監査: 佐藤正孝・奥島雄一

英文誌編集委員: 上野俊一(編集長)・近雅博・森本桂・新里達也・野村周平・大原昌宏・佐々治寛之

和文誌編集委員: 鈴木互(編集長)・長谷川道明・川島逸郎・奥島雄一・吉富博之

自然保護委員会: 野村周平(委員長)

【入会方法・会費など】

(1) 会費

新入会費 ¥1,000

一般会員年会費 ¥7,000(2005年度から)

賛助会員年会費 ¥10,000以上

国外居住者は年会費に¥2,000を加算・前納制。

(2) 入会方法

学会ホームページから入会申込書書式をダウンロードし、必要事項をご記入の上、事務局宛、お手紙、FAX、電子メールでお送り下さい。ホームページを利用されない方は事務局宛、入会手続き書類一式をご請求ください。さらに、上記の新入会費+年会費を郵便振替にて、00180-3-401793 へ送金いただきますと入会手続き完了となります。大会の際の受付での入金も可能です。

事務局：〒169-0073 東京都新宿区百人町 3-23-1 国立科学博物館動物研究部昆虫第2研究室内 FAX: 03-3364-7104 E-mail: nomura@kahaku.go.jp

(3) 認定退会

毎年の「甲虫ニュース」最終号送付の際に、その翌年度の会費を請求いたします。

翌年の前半のElytra発送までに納入されない場合、以後の会誌送付を打ち切ります。会費切れの状態2年経過の場合、認定退会をご案内いたします。認定退会者は再入会の際に新入会費が必要となりますのでご注意ください。

【活動】**(1) 会誌発行**

欧文誌(一部和文)「Elytra」、日本鞘翅目学会の同名会誌(1973~)を継承。1号当り100頁以上、年間2冊発行。

和文誌「甲虫ニュース」(解説・短報・連絡記事掲載誌/和文)。甲虫談話会の同名会誌(1968~)を継承。1号当り原則8頁、年間4冊発行。

その他必要に応じ、「鞘翅学会特別報告」を発行。

(2) 行事

大会・総会：年1回(当分の間、毎年11月、1日間)開催。一般講演を公募。

例会：原則として、年間に例会を3回(講演中心)、採集例会を1回(採集地にて)、特別例会を1回(日本甲虫学会と共催で日本昆虫学会大会の折に)開催。

【自然保護委員会】**(1) 委員会の目的**

・日本のレッドデータ甲虫の現状を把握するための調査を行い、その結果をまとめる。

・他の同目的の組織と協同するなどして、学会として種の多様性保全に取り組む際の窓口となる。

(2) 委員会の構成

委員長：野村周平[委員会の統括；委員会議長]

副委員長：荒谷邦雄[委員長補佐]

委員：藤田宏、平野幸彦、今坂正一、苅部治紀、森本桂、森田誠司、新里達也、大林延夫、大木裕、斉藤秀生、佐藤正孝、上野俊一(a b c順)

(3) 最近の活動実績

1) オオクチバス(ブラックバス)に対する水産庁の「すみわけ方針」に対して、2001年2月、日本魚類学会、日本蜻蛉学会と共同で、反対の立場から農林水産大臣、水産庁長官はじめ関係都府県に要望書を提出しました。

2) 滋賀県は、2002年6月19日から7月18日までの間、「滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例要綱案に対する意見・情報の募集を行いました。この要綱案では、一部実効性に疑問が持たれる内容もあり、また、オオクチバスの釣りによって利益を享受

しているバス、釣り具業界、貸しボート店などからの強い反対が予想されたため、本学会でも適正な条例制定に向けた意見書を滋賀県知事宛に送付致しました。

3) 外国産昆虫類の輸入に関する要望書を、日本昆虫学会・日本甲虫学会・日本昆虫分類学会と共同で、環境大臣・農林水産大臣・経済産業大臣に提出しました(2002年12月31日付)。

4) 千葉県内において、絶滅危惧種であるシャープゲンゴロウモドキの生息地が圃場整備のため破壊される恐れが出てきたため、千葉県知事に対し、当該種生息地の保護に関する要望書を緊急に、会長並びに自然保護委員会委員長名で提出しました(2003年7月7日付)。これに対し、8月27日付で千葉県知事より、地元関係者と協議の上、16年度以降に工事を延期し、調査および保全対策についても専門家の助言や意見を求めている旨の回答がありました。

5) 学会ホームページ内に「ペット甲虫と外来種の問題を考えよう」というコーナーを新設し、外来種問題に関する議論の喚起と情報の提供を行いました(<http://www.soc.nii.ac.jp/jsc2/gairai/gairai.html>)。

6) 2003年10月6日より11月5日まで、環境省中央環境審議会野生生物部会移入種対策小委員会中間報告に係る意見の募集(パブリックコメント)が行われました。これは、外来種対策の法制化に向けて、一般の意見を求めたものでした。当委員会ではこのパブリックコメントに対してメールで合議した後、会長および自然保護委員長名で回答を行いました。

7) 2005年2月3日より3月2日まで、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律(外来生物法)」の対象となる特定外来生物等に係る意見の募集(パブリックコメント)が環境省により行われました。当委員会ではこれに対して合議の上、学会名で回答を行いました。

8) 東京都によって、2005年3月1日より3月10日まで、「自然地の適正利用・管理へ向けて(中間のまとめ)」に関するパブリックコメント募集が行われました。委員会ではこれに対して合議の上、学会名で回答を行いました。

以上の詳しい内容については、学会ホームページ内「自然保護委員会から」のページをご覧ください。

【最近のトピック】

1) スイスのIvan LöblとカナダのAles Smetana編集による、旧北区産甲虫のカタログ「Catalogue of Palearctic Coleoptera」の、第1巻(ナガヒラタムシ亜目・ツブミズムシ亜目・オサムシ亜目、819pp.)および第2巻(カブトムシ亜目、ハネカクシ系列、942pp.)がApollo Booksから刊行されました。日本・中国・韓国も含まれ、アジアの研究者にとっては必携の文献です。各種について、種名・原記載の頁数・原記載時の属名・分布(地域、国名を略号で示す)が示されています。他のグループも順次刊行される予定です。

2) 日本昆虫学会が編集している「日本昆虫目録」の甲虫の巻についても、当学会の会員が全力を挙げて執筆に協力しています。これは従来の、学名・和名・分布などを記したチェックリストよりもさらに充実したものを目指しており、原記載文献・日本で使われた主なシノニム・タイプロカリティーまで登載の予定です。

3) この3年間ほどの当学会大会におけるシンポジウムのテーマは次の様なものです。第15回(2002:大阪)「日本の甲虫分類学の行くえと指導体制」・第16回(2003:福岡)「甲虫系統分類学の進歩」・第17回(2004:小田原)「神奈川県産甲虫5,000種達成には?

～地域甲虫相の徹底解明に向けて～」。また、第15回で行われた緊急アピール「大型ペット甲虫輸入規制緩和に対する緊急アピール」、第16回で行われた特別企画ワークショップ「甲虫のDNA研究の現状」も、会員が高い関心を示すテーマとしてプレゼンテーションが行われました。

年次大会:毎年9月～11月に年次大会を開催している。今年度は第44回大会が、2005年11月12～13日に東北大学で開催される。

事務局:606-8502 京都大学大学院理学研究科動物学教室 日本爬虫両棲類学会事務局

ホームページ: <http://zoo.zool.kyoto-u.ac.jp/herp/indexj.html> 年次大会, 出版物, 入会申込などの情報をのせている。発行された雑誌の論文リストや, 学会制定の日本産爬虫両生類の標準和名リストもあげている。

日本爬虫両棲類学会

正田努(日本爬虫両棲類学会庶務幹事)

歴史:学会の生い立ちについては, 深田(爬虫両棲類学会報, 2002(1):13-21)が詳しい記録を残している。それによると1961(昭和36)年に, 爬虫類同好者・研究者などを集めて, 爬虫類談話会が発足した。1962(昭和37)年11月3日に爬虫類談話会が青山学院大学で開催され, その席で談話会が解散, 爬虫類学会が設立された。この会合が爬虫類学会の第1回大会である。その後, 両生類を加えて, 日本爬虫両棲類学会となったのは1965(昭和40)年である。初代会長(1964～1975)は岡田彌一郎で, 事務局は青山学院大学(1962～1971)にあった。1972年より事務局が京都教育大学へ移り, 2代目会長(1978～1988)となった深田祝が, 滞りがちになっていた会誌の発行と学会の運営に尽力した。京都教育大へ事務局の移った1972年頃から, 爬虫両生類に興味を抱いた大学生や大学院生が入会してきた。事務局はその後, 京都大学教養部から理学部動物学教室(理学研究科動物学教室)へ移っている。

目的と活動:会則に明記されているように, 学会は爬虫類・両棲類の研究者・愛好者相互の協力親睦をはかり, 爬虫類・両棲類の研究並びに保護を目的とする。この目的のため, 会誌の発行, 年次大会の開催を行っている。その他, 日本産爬虫両生類の標準和名の制定や希少爬虫両生類の商取引に反対する声明を出すなどの活動も行っている。

会員数と構成:現在の会員構成は, 一般会員412名(国内399・国外13), 名誉会員1名, 団体会員9名, 賛助会員1名である。この他国外の研究機関や著名な研究者に会誌を寄贈している。会の運営は, 会長1名, 評議員8名と幹事4名(庶務, 会計, 英文誌編集, 和文誌編集)による運営委員会で行っている。会長, 評議員は任期2年で, 会員の互選による選挙で決められる。幹事は運営委員会が会員から選出する。

年会費:1989年に3,000円から5,000円に値上げされ, 会費はそのまま維持されている。

出版物:現在, 英文誌の「Current Herpetology」と和文誌の「日本爬虫両棲類学会報」を年に各2回発行している。最初の会誌名「爬虫類学雑誌」は「爬虫両棲類学雑誌」に変更され, 英文誌名は「Acta Herpetologica Japonica」から「Japanese Journal of Herpetology」, さらに「Current Herpetology」に変更された。和文誌の「爬虫両棲類学会報」は1999年に発刊した。現在の編集幹事は英文誌が太田英利, 和文誌が福山欣司である。

その他の出版物としては, 1988年に行った第2回日本爬虫両棲学シンポジウムのプロシーディングス「Current Herpetology in East Asia」(1989, 512p)がある。

日本分類学会連合加盟学会の大会・シンポジウム

日本哺乳類学会

日本哺乳類学会2005年度大会が, 第9回国際哺乳類学会議(IMC9;主催:日本学術会議・日本哺乳類学会)の会場で開催されます。研究発表はIMC9と一体となり, 総会, 各種専門委員会などはIMC9のワークショップとして開催されます。例年とは大会の日程, 形式とも異なりますので十分にご注意ください。IMC9の詳細はホームページ: <http://www.imc9.jp> でご確認ください。

会場:札幌コンベンションセンター(〒003-0006 札幌市白石区東札幌6条1丁目)

日程:2005年7月31日(日)～8月5日(金)

日本ダニ学会

日本ダニ学会第14回大会が以下の要領で開催されます。

会期:2005年9月20日(火)～22日(木)

会場:ホテルノースランド帯広

〒080-0012 帯広市西2条南13丁目3番地1

TEL(0155)24-1234

JR帯広駅南口徒歩1分。帯広空港からは帯広駅前あるいは市内ホテル行きのバス(乗車賃1,000円)が利用できます。

日程:

9月20日(火) 編集委員会(15:30～16:30)
評議委員会(17:00～18:00)

9月21日(水) 一般講演(09:00～12:00)
総会・記念写真(13:00～14:30)
特別講演(14:30～15:45)
一般講演(16:00～18:30)
懇親会(19:00～21:00)

9月22日(木) 一般講演(09:00～12:00)
ランチョンセミナー(12:00～13:00)
一般講演(13:00～15:00)

地衣類研究会

第34回地衣類研究会総会と地衣類観察会を下記の通り開催します。今年は地衣類研究会では初の海外での開催です。奮ってのご参加をお待ちしています。

集合場所・時間

韓国・済州島空港
8月20日(土) 16:00

日程

8月20日
17:00-17:30 受付
17:30-18:30 総会
18:30-19:30 済州島の地衣類に関する講演

19:30-21:30 懇親会
 8月21日
 09:00-16:00 観察会・島内観光
 16:00-17:00 持参標本の同定会
 17:00-18:30 記念講演
 19:00-20:30 海産物料理

8月27日(土)
 シンポジウム, ワークショップ, 自由集会
 (川内キャンパス)
 8月28日(日)
 シンポジウム, ワークショップ, 自由集会
 (川内キャンパス)
 8月29日(月)
 進化学夏の学校(川内キャンパス)

日本古生物学会

日本古生物学会 2005 年年会・総会が 2005 年 7 月 1 日 ~7 月 4 日の会期で, 東京大学本郷キャンパスにおいて開催されます.

日程:

7月1日(金)
 09:15-16:15 学会創立 70 周年シンポジウム
 16:25-17:35 総会
 18:00-20:00 懇親会
 7月2日(土)
 09:10-12:05 個人講演
 12:40-13:30 ポスターセッション
 13:30-16:55 個人講演
 7月3日(日)
 09:10-12:05 個人講演
 13:15-14:35 個人講演
 7月4日(月)
 ショートコース(事前申し込みが必要)

日本動物分類学会

日本動物分類学会第 41 回大会が徳島県立博物館で開催されます. 多数のご参加をお待ちしております.

日程:

6月11日(土)
 13:00-15:25 一般講演
 15:40-16:50 総会
 16:50-17:20 学会賞受賞記念講演
 17:20-17:50 奨励賞受賞記念講演
 18:45-20:45 懇親会
 6月12日(日)
 09:00-10:55 一般講演
 11:00-12:00 ポスター発表
 13:00-15:10 一般講演

日本プランクトン学会

2005 年度の日本プランクトン学会と日本ベントス学会の合同大会が以下の要領で開催されます. 奮ってご参加下さいませようお願いします.

開催期間: 2005年9月23(金) - 25日(日)

開催場所: 厚岸町役場(北海道厚岸町)

日本進化学会

第 7 回日本進化学会東北大会が以下の要領で開催されます.

会場

東北大学 川内キャンパス
 〒980-8576 仙台市青葉区川内
 Tel. 022(717)7800
 仙台国際センター
 〒980-0856 仙台市青葉区青葉山
 Tel. 022-265-2211 Fax 022-265-2485

日程

8月26日(金)
 授賞講演, 総会, 国際シンポジウム
 (仙台国際センター)

日本昆虫学会

日本昆虫学会第 65 回大会が下記の要領で開催されます. 会場: 岡山大学教育開発センター(岡山市津島中 1-1-1) 日程: 2005 年 9 月 23 日(金) ~9 月 25 日(日)

日本菌学会

第 49 回日本菌学会大会が, アメリカ菌学会と合同で以下の要領で開催されます.

会場: ハワイ大学ヒロ校

日時: 2005 年 7 月 30 日(土) ~8 月 5 日(金)

詳しくは大会ホームページ http://www.soc.nii.ac.jp/msj7/html/meeting/2005_msj_msa/index.html をご覧ください.

第 4 回日本分類学会連合公開シンポジウム

表記シンポジウムが 2005 年 1 月 8 日(土)に国立科学博物館分館研修研究館 4 階講堂において開催されました. 脊椎動物・昆虫・海藻・菌類・樹木・無脊椎動物の専門家 6 名の演者をお迎えし, 分類学会連合ならではの多彩な講演内容となりました. 以下に講演の要旨を転載いたします.

テーマ: 「種の違いをどのように見分けるか: 生物を種の単位で見よう」

開催日: 2005 年 1 月 8 日(土)

場所: 国立科学博物館分館

(東京都新宿区百人町 3-23-1)

日程:

13:30~13:40 松浦啓一(国立科学博物館)
 連合代表あいさつ
 13:40~14:15 疋田努(京都大学理学研究科)
 「爬虫類の種 ヘビとトカゲの見分け方」
 14:15~14:50 丸山宗利(国立科学博物館)
 「昆虫の種を見分ける方法 いくつかのアリ
 共生型昆虫 を例に」
 14:50~15:25 川井浩史(神戸大学内海域環境教育
 研究センター)「分子系統からみた褐藻コンブ類
 の多様性と種」
 15:25~15:50 休憩
 15:50~16:25 出川洋介(神奈川県立生命の星・地
 球博物館)「自然界に生きるカビの種を探る」
 16:25~17:00 湯浅浩史(進化生物学研究所)
 「巨樹バオバブを分類する」
 17:00~17:35 大路樹生(東京大学理学系研究科)
 「生きている化石, ウミユリの分類 どの形
 質が重要か?」
 17:35~18:00 全体的な質疑応答
 18:30~ 懇親会

緒言

地球上には微生物や植物, そして我々人類を含む動物などの実に多様な生物が生息しています. 日本分類

学会連合は、様々な分類群の生物を対象として、分類学的研究を協力して進めることを目指して2002年1月に発足しました。分類学関係の学会が連合して分類学的发展とその普及を図る活動をはじめて3年が経過したことになります。この間に本連合はホームページを設けて分類学関係の情報普及に取り組むとともに、本連合の構成員や分類学に関心をもつ人達のために「TAXA」というメーリングリストを開設しました。

また、本連合は分類学研究の成果を分かりやすい形で社会に発表するため、毎年シンポジウムを開いてきました。昨年のシンポジウムでは「移入種と生物多様性の攪乱」および「新種記載をスピード・アップする方策を探る」をテーマとしました。本連合は生物の分類や系統、種の問題に重点を置いています。生物多様性研究や生物多様性の保全にも大きな関心をもっています。そのため、昨年のシンポジウムでは、生物多様性の保全に重要な影響をもつ移入種を取り上げた次第です。

今回のシンポジウムは「種」をめぐる問題がテーマです。「種」は分類学にとって基本的な課題です。「種」の認識や定義から始まり、「種分化」や「種間関係」をはじめとして、実に様々な問題がこれまでも大きな論争を引き起こしてきました。今回のシンポジウムは「種」をめぐるこのような課題にももちろん関係はするのですが、我々が日常的に目にする生物を題材として、「種」はどのように識別されるのか、生物のグループが異なると「種」はどのような姿となるのかという基本的な問題に重点を置いています。「種」をめぐる問題を取り扱おうと、分類学をはじめとする生物学の様々な分野の研究状況を知ることできます。今回のシンポジウムを通じて多くの皆さんが「種」の問題に興味をもち、分類学や生物多様性に取り組んで下されば幸いです。

2005年1月8日
日本分類学会連合
代表 松浦 啓一
(国立科学博物館・動物研究部)

爬虫類の種 - ヘビとトカゲの見分け方

伊田 努 (京都大学理学研究科動物学教室)

爬虫類学者たちは爬虫類の種を色や模様、体の形などの形態的な情報によって爬虫類の種を区別してきた。たとえば、ヘビとトカゲをどうやって見分けられるのかについて見てみよう。ヘビ類はトカゲ類の祖先から進化してきたグループで、四肢が退化し、有能の捕食者として多様化した。では、四肢の有無によってこの2群を見分けることができるかという、そう簡単ではない。トカゲ類では多くのグループで並行的に四肢の退化が生じており、四肢の退化したトカゲ類はかなりの数にのぼる。一方、原始的なヘビ類には退化した痕跡的な後肢が残っている。だから、四肢の有無でヘビとトカゲを区別することはできないのである。耳孔の有無、腹板(腹側の幅の広い鱗)の有無、まぶたが可動性のような特徴を組み合わせ、区別する必要がある。腹板があればヘビ類だが、腹板を持たないからといってトカゲではない。原始的なヘビ類の腹面は、トカゲ類と同様に同形の小さな鱗におおわれる。ヘビ類は眼は空いたままで、まぶたを閉じることができない。透明化したまぶたがコンタクトレンズのように眼をおおっているのである。トカゲ類ではまぶたが動くが、ヤモリ類のようにある種のトカゲ類ではまぶたが固着し

て、眼をおおう鱗が透明化し、ヘビ類と同様になっているものもある。ヘビ類では耳が退化し、耳孔も失われている。一方、トカゲ類ではたいてい耳孔が空いているが、一部のトカゲ類ではヘビ類同様に耳の穴は鱗でおおわれ鼓膜も消失している。

爬虫類はその体が鱗や甲におおわれているので、この鱗の数や形が種の識別に役立つ。特に頭部の鱗にはすべて名前が付けられていて、その有無や形、数が重要な識別形質となっている場合が多い。しかし、形質によっては数や形に種内変異があって、種間で変異が重なる場合もあるので、形態だけに頼る訳にはいかないのである。

それでは、爬虫類自身はどうやって自分と同じ種か別の種かを区別しているのだろうか。昼間活動する樹上性のトカゲ類は優れた視覚を備えているので、種の識別には色彩を用いているものが多い。イグアナ類やアガマ類ではカモフラージュの色彩の中に、種の識別のための派手な色彩が隠されている。繁殖期の雄のどをひろげると種独特の非常に目立つ模様や色彩が現れる。このような模様や色彩は、種の違いとして重要だが、爬虫類の標本は液浸で保存されるため、生きていた時の色彩が失われる。このため、博物館標本では近縁種の違いを見つけること困難な場合もある。

一方、見通しの悪い地上に棲むトカゲ類では、においが識別に用いられている。かれらは近づいて相手のにおいを嗅ぎ、これによって種や雌雄を区別する。このようなすぐれた嗅覚を持つ爬虫類では、近縁種を形態から識別することが困難な場合がある。ヘビ類は耳が退化し、聴覚を失ったかわり、優れた嗅覚を得ており、樹上生活するものでも嗅覚によって種の識別を行っているらしい。このためヘビ類では地上性のトカゲ類と同様に、近縁種で形態の違いがはっきりしないものがあり、雌雄の違いも小さい。

爬虫類には雌だけしかいない特殊な種がいる。日本では、オガサワラヤモリ、キノボリヤモリ、ブラーミニメクラヘビがこれで、いずれも移入種で非常に広域に分布している。これらは雑種起源の3倍体単為生殖種で、雌だけでクローン的に増える。オガサワラヤモリは太平洋の島々に広く分布するが、模様の微妙に異なる複数のクローンが含まれている。このようなクローンは生息場所や性質も微妙に異なっており、これらをどう分類するかは難しい問題である。

昆虫の種を見分ける方法 - いくつかの アリ共生型昆虫とアリを例に

丸山 宗利 (国立科学博物館動物研究部)

昆虫の種を見分ける方法は分類群により千差万別である。その理由のひとつに、種の違いとして観察される形質の種類が分類群によって様々ということがある。たとえばチョウとクワガタでは、それぞれ翅の模様と大顎の形が種によって異なり、種を見分ける情報となる。ただし多くの場合、一つの情報で種を見分けるわけではなく、チョウであれば翅の模様と生殖器の形など、いくつかの情報を組み合わせることによって判断がなされる。また、ある分類群のチョウでは翅の模様が使えないというような例外もあり、実情は少しややこしい。

昆虫は既知種だけで約80万を数え、それらは多数の分類群に分けられている。情報の量や組み合わせの数、例外の存在を考えると、種を見分ける方法はまさに千

差万別となる。

本講演では、演者の専門とするアリ共生型昆虫とアリを例に挙げ、昆虫の種を見分ける方法について紹介する。数多ある方法のなかでは九牛の一毛に過ぎないが、これらをもって代表例としたい。

(1) アリノスハネカクシ族の数属(コウチュウ目:ハネカクシ科)

千差万別といっても、昆虫の種を見分ける方法にはある程度の傾向がある。昆虫の分類において最も頻繁に利用される情報は、生殖活動に関係する形態形質(二次性徴、交尾器など)である。その理由として、種間の差異が明瞭であり情報量が多い、その違いが生殖的隔離を示唆する、などのことが挙げられる。昆虫において、そのなかで重要視されることが最も多いのは交尾器の形態である。ハネカクシ類でも同様で、一見して区別し難いような種でも、交尾器形態(とくに雄)によって容易に区別できる場合が多い。

(2) アリノスアブ属(ハエ目:ハナアブ科)

いっぽう、交尾器では種の区別がつかない分類群も少なくない。アリノスアブ類はその好例で、種間での差が少ないうえ、種内での変異が多いことから、交尾器形質が信頼できない場合がある。その代わり、色彩や各部の計測値などにより、正確に種を見分けることができる。

同所的に複数の近縁種が生息する場合、交尾器形態の相違は物理的な生殖的隔離に働くと考えられることが多い。今回紹介するアリノスアブの数種は同じアリの寄主とするが、異所的に分布しており、そのことを交尾器形質の差異が少ない要因の一つとして考えることもできる。

(3) アリツカコオロギ属(バッタ目:アリツカコオロギ科)

しかし、同所的に分布していたとしても、種間で生息環境が完全に異なれば、物理的な生殖的隔離は不要となる。同所的に複数種が分布するアリツカコオロギ類では、アリの巣という閉鎖環境で各種が別々の種のアリを寄主としているため、種間の接触機会は少ないと考えられる。そのためか生殖活動に関係する形態形質に差がなく、一般に分類は困難とされてきた。演者は分類に有用な形質を探索し、体表の微細構造に種間の明確な差異を見いだすことができた。また、この結果は分子系統解析によっても支持された。

アリツカコオロギは寄主の体表炭化水素を体表に吸着し、寄主の巣に受け入れられている。体表の微細構造における種間の差異は、寄主の体表炭化水素を各種がより効率的に吸着するための適応の結果と考えられる。

(4) クサアリ亜属(ハチ目:アリ科:ケアリ属)

昆虫の種を見分けるための情報は形態だけではない。フェロモン組成や体表成分など、化学形質が鍵となることもある。クサアリ類は日本において同所的に5種が分布しているが、一般に種の同定は困難である。演者は各種のアリが発する防御物質の臭いに違いがあることに気付き、その成分を化学分析したところ、種間で明瞭な違いが確認された。そして慣れれば、その臭いによって野外で種を見分けることができる。

クサアリ類は一時的社会寄生を行うアリで、巣の創設期には寄主とともに生活する。防御物質は警戒フェロモンとしての役割も果たすことが知られ、ある種では防御物質の成分が寄主と一致することが判明した。このことから、防御物質の成分の違いは、異なる寄主への生態的な同調の結果と考えられる。

以上のように、昆虫の種を見分ける方法は、分類群

によって実に様々である。そして、多角的に見れば見るほど新しい情報が増える場合が多い。今後いろいろな機器や手法が発達するにつれ、また、新たな視点を持った研究者が現れるにつれ、昆虫を見分ける方法はますます多様化するであろう。

分子系統からみた褐藻コンブ類の多様性と種

川井 浩史(神戸大学内海域環境教育研究センター)

ほとんどの生物において、種の認識に「形態」(いわゆる「形」だが、特に「外部形態」)が最も基本的な形質として用いられている。このため、形態が単純な生物よりは複雑な生物が、また形態が不安定な生物よりは安定した生物の方が、種として認識され、また同時に細分されやすい傾向がある。このため、形が単純でかつ変異しやすい海藻類はその種レベルでの(あるいはそれよりもっと高次の分類階級での)多様性が見過ごされやすい傾向がある。加えて海藻類は陸上の生物よりは採集に困難が伴う場合が多く、現在でも未記載の種類がかなり頻繁に見つかる。このような事情から、海藻類の分類はまだまだ、「遅れている」あるいは「やりがいのある」領域であるが、形態による情報が限られている分、分子系統学などの遺伝形質を用いた解析が有力な研究手段となる。

いわゆるコンブ類を含むコンブ目は褐藻類の中でも最も大型の藻体を作り、海の森に相当する「藻場」を作るなど、生態的にも非常に重要な系統群である。しかしコンブ類の種レベルでの分類は依然としてやや混乱した状況にあり、またその進化系統上の、あるいは生物地理学的な起源についても不明であった。一般に知られているコンブ類は、比較的顕著な葉状の部分と茎(および仮根と呼ばれる付着部)からなるが、原始的とされるものでは葉状の部分無く、円柱状のものもある(ツルモ類)。日本では食品としてもなじみ深いコンブ属の種は、形態が単純である上、生育環境による変異が大きく、種レベルでの分類が難しいグループである。また、古くから食品として利用されてきたために、それぞれの産地での名前が付けられており、さらに分類がわかりにくくなっている。これらの種レベルでの分類は最近の分子系統学的な研究によって、整理が始められている。

一方、外観上はコンブやツルモに似ているため、コンブモドキ、ニセツルモなどと名付けられた種類がある。これらはいずれもその解剖学的特徴が異なるため、コンブ目とは別の目(それぞれウイキョウモ目、ナガマツモ目)に分類されていた。しかし、培養実験によってその生活史を調べると、これらの種は何れもコンブ類同様、大型の世代(孢子体)と顕微鏡的な大きさの世代(配偶体)の間で、異型の世代交代をするという点で、共通していた。また、ニセツルモは卵生殖をする点でもコンブ目の特徴と良く一致するので、コンブ目に移された。しかし、ニセツルモについてはコンブ目とは異なり、雌雄の動配偶子による、有性生殖を行うと考えられることから、その目レベルの帰属は不明であった。しかし、分子系統学的な解析から、いずれも、何れもコンブ目と近縁であることが確かめられ、さらにこれらの種類が分布するオホーツク海周辺がコンブ目全体の起源である可能性が示された。

ツルモは、長さ数メートルに達する、ひも状の海藻だが、北半球の広い範囲にこの一種だけが分布すると考えられてきた。しかし、日本海の中部付近から通常のツルモよりはるかに堅く、短い種類が見つかり、

新種カタツムリとして記載された。これをきっかけに、世界のツルモを対象に分子系統学的な解析を行った結果、日本でツルモと呼んでいた種類はヨーロッパで記載された本当のツルモとは異なる種であり、またこのほかにも太平洋沿岸では数種の隠蔽種が見られることが明らかになった。

自然界に生きるカビの種を探る

出川 洋介(神奈川県立生命の星・地球博物館)

カビは身近な生物である。正月も明ける頃、餅を鮮やかに彩る黄色や黒の斑点はコウジカビ属の仕業だ。しかし、この属には酒、味噌、醤油など発酵食品の生産に欠かせない種も、或いはカビ毒生産性やヒト病原性の種もまた含まれている。コウジカビ属のように経済と直接関わりを持つカビの種を正確に同定することは、社会から要請された課題でもあった。

カビは一般に1)培養が容易、2)生きたまま保存が可能、3)短期間に生活史を全うするなど、実験室内で扱いやすい微生物としての特質を備えている。そのため、栄養、温度などを同一にした条件下で培養し、生材料に基づいてコロニーや顕微鏡的形態を比較すれば種を同定できる。

しかし微生物は小さく、観察しづらい。目に見えぬカビの胞子は、容易に受動分散され、コスモポリタンの種も多いと考えられるが、屋外でのカビの姿は意外なほど、実は知られていない。偶然、餅や培地上に姿を現したカビといえども、自然界のどこかに本来の微小生息地があり、そこで本来の生活を送っているはずだ。ここでは、演者が追ってきた、動物と関わる菌を例に、天然での生き様を踏まえたカビの種に迫ってみたい。

培養可能な動物腐生菌の種

一つまみの土を培地にまくと、数日以内に様々なカビが生えてくる。しかし、この方法では常に幾つかの常連の種ばかりが目立つことに気付く。陸上動植物の遺体はみな分解されて土に戻る。混沌とした土の中には更に多くのカビが居るはずだ。実体顕微鏡を屋外に持ち出し、直接、土の表面を観察すると見慣れぬカビが多く、特に、動物遺体に集まるカビには未知種が多かった。そこで動物遺体を餌として土から直接カビを釣る方法(釣菌法)を適用したところ好結果を得た。

接合菌類 *Actinomortierella* 属は平板法では稀なカビだが、釣菌法によって土壌動物の活性が高い場所からは普通に釣り出された。日本各地での調査により、同属には、生息環境や対応する動物種が異なる類縁種6種が含まれること、また産地の異なる多数菌株の交配実験により、分布域や温度適性が異なり、生殖前隔離を示す同胞種(隠蔽種)を含んでいる種もあるということが判明した。培養可能な腐生菌では、微小生息地や嗜好基質など、本来のカビの住みかの解明が、地理分布の調査を可能にし、類縁種の発見のための手がかりをもたらししてくれる。

培養不可能な動物絶対共生菌の種

生きた宿主から栄養を得る絶対寄生菌、共生菌などの純粋培養は難しく、腐生菌のように培養条件を揃えて種を比較することはできない。だが、反面、宿主との関係が深い故に、顕著な適応を示し、種を特徴付けやすいという例もある。接合菌類トリコミケス綱のカビは、節足動物の腸内に絶対共生するため、その研究

にはまず顕微鏡下で小動物を解剖し、腸管を開いて菌体を摘出して観察をする必要がある。

しかし、飼育を通じて観察された宿主動物の脱皮や排泄等の行動に対応するカビの挙動に着目したところ、従来、見落とされていた新たなステージの胞子形成が明らかになってきた。倍脚綱動物の腸内共生菌 *Enterobryus* 属のカビは、腸内での形態が極めて単純な為、宿主の違いに基づいて多種が記載され混乱気味であった。このカビは、宿主体外の糞上で全く形態の異なる二次胞子を形成すること、その胞子に基づくと従来別種とされたものが幾つかにまとめられる可能性のあることがわかった。

巨樹バオバブを分類する

湯浅 浩史(東京農業大学・(財)進化生物学研究所)

顕花植物の分類は花が重視される。その自然分類はいみじくもバオバブの学名 *Adansonia* に名を残す Adanson 以来の手法である。とは言っても、開花までに年月を要する海外の大木となると、これは容易ではない。巨樹で知られるマダガスカルバオバブも同様である。

近代的な分類の手法では、機器や試薬を用いた染色体数や核型分析、化学成分の分析、さらに近年は DNA の塩基配列に基づく分子生物学的な手法も盛んである。

確かに DNA 解析は華々しいが、現在はまだ特定部分の比較に限られるため、解析部位によって相違が生じる。また、バオバブは高次の倍数体(8倍体)と見られるため、同祖染色体が少なくなく、解析には注意が必要である。

同種か別種を同定するには、交雑能力、雑種の染色体対合や稔性など細胞遺伝学的手法が最も有効であるが、バオバブのように開花まで条件がよくても20年近くかかる樹木では、用い難い。

では、どうすればよいのか。その答えの一つは徹底したフィールド調査と言える。私が試みた手法は(1)分布の把握、地質との相関(2)地理的な変異の傾向、(3)環境による樹形の変化、(4)幼木、若木、成木へと樹齢による成長変化、(5)花期の把握である。

1973年に私がバオバブの調査を始めた頃にはすでにマダガスカルバオバブは10種もの記載がされていた。しかし、その分布も記載も不十分で、例えば *Adansonia madagascariensis* はマダガスカルの北部から西部、南部の一带に分布する(実際は北部と北西部に限定)、*A. suarezensis* は赤花で夏咲き(実際は白花で冬咲き)などの誤りがモノグラフに記述されていた。また、現在バオバブの観光で有名なムルンダヴァバオバブも、私が最初に出向いた1990年には地元では *A. madagascariensis* と思われていた(実際には *A. grandidieri*, *A. fony*, *A. za* がすみわけ)など分類は混乱していた。

マダガスカルは日本の1.6倍もある広大な面積の上、道路事情が悪く、特に雨期には寸断、何ヶ月も不通になり、また、乾期には行動はできてもバオバブは半年以上も葉を落としてしまい、花も咲かないなど、調査には制限が多い。そのため今なお未踏査の地域も残されているが、分布はおおよそ把握でき、環境による生態的な樹姿の相違も、種特有の枝ぶりや樹皮での識別が可能になった。

植物民族学的調査からバオバブには人為分布が存在し、枝葉の利用による樹姿の変形があるなども明らかにできた。

以上数多くのバオバブの個体を現地調査の中で、生態的変異、人為的な変形、地理的な変異を見極められ、それによって花だけでなく、葉の形質の評価の軽重が確立できた。

さらに持ち帰った種子を播いて育て、その初期形態を比較したところ、分類上有効な形質評価の基準となりうる事が判明した。

これらの視点を踏まえ、現地のバオバブの写真を示しながら、マダガスカルバオバブ 8 種を分類、特に従来 *A. za* の変種とされてきた *A. bosy* を種として扱うなどバオバブの実体を紹介する。

バオバブの分類と分布

1. *A. suarezensis* マダガスカル北部石灰岩台地
 2. *A. madagascariensis* マダガスカル北部～西北部
 3. *A. perrieri* マダガスカル北部熔岩、石灰岩台地
 4. *A. bosy* マダガスカル北西部川岸
 5. *A. digitata* マダガスカル西部、北部の人里、アフリカ大陸
 6. *A. fony* (*A. rubrostipa*) マダガスカル西部～南部の乾生林、石灰岩上
 7. *A. grandidieri* マダガスカル西部
 8. *A. za* マダガスカル西部～南部
 9. *A. gregori* (*A. gibossa*) オーストラリア北西部未確認
- A. alba* マダガスカル北西部上流川岸
A. stanburyana オーストラリア北西部

生きている化石、ウミユリの分類 どの形質が重要か？

大路 樹生 (東京大学理学系研究科地球惑星科学専攻)

ウミユリは生きている化石として有名な動物である。現生のウミユリ類は一生涯茎を維持する有柄ウミユリ類と、成長途中で茎を自切し、自由生活を送るウミシダ類に大別される。有柄ウミユリ類は古生代を中心とする地質時代に繁栄し、高い多様性と個体数を持っていたのに対し、現生有柄ウミユリ類はわずか 80 種類前後にしか過ぎない。しかも地質時代には浅海に多数生息していた有柄ウミユリ類は、現在 100 m を越える深度にしか生息しない。その一方、三疊紀後期に出現したウミシダ類は浅海から深海に至る環境に広く分布し、約 500 種類が知られている。

棘皮動物の骨格は、一般的に多数の高マグネシウム方解石の板が多数集まって形成されるが、ウミユリの場合も同様で、腕、ガク、茎はそれぞれ特徴的な形態を持つ多数の板から構成されている。またこれらの小さな板が集まってできている茎やガク、腕全体の形態も分岐や枝分かれを持つか否かなどの形質を持っている。すなわちウミユリには非常に多くの形態的形質がある。これらのうちどのような形態に着目して分類するかによって異なる分類が生じる。

以下、特に私が主に扱っている有柄ウミユリに関する分類に関して述べることにする。有柄ウミユリ類の分類は茎の関節面の形態に基づく Roux, Klikushin らの分類と、腕の分岐パターン、腕板の間の鞣関節の種類、配置に基づく Rasmussen, Simms らの分類がある。どちらの形質を重要視する分類が妥当性が高いかは、独立で信頼度のある分類、例えば分子情報に基づく分類と照らし合わせて検討されねばならないと考えられる。分子情報に基づく分類は始まったばかりで、興味深い結果が出つつあるが、まだ形態形質との比較まで

は至っていない段階である。形態形質に基づく分類では、まず腕の形質に基づく科、亜科レベルの分類がまず行われ、次いで茎の形態や腕の細かい形質に着目して細分していくことが一般的である。

化石の場合には大きなハードルが存在する。限られた部品からいかに鑑定を行うか、これが化石の分類を行う上で直面する問題である。ウミユリは死後、骨格を結びつけていた靭帯や筋肉が分解し、骨格がバラバラになると完全な個体が見つかることは極めて稀となる。これは現生種の分類に比べて著しく不利な点である。多くの場合、茎板のみが見いだされることが多く、ガクや腕の部分はまれにしか見つからない。このことから化石の場合、茎に基づく分類が盛んに行われてきた。しかし、最近では上に述べたように腕の形質が重要視されているため、茎しか見つからない場合には無理に細分を行わず、open nomenclature にとどめることが多くなっている。

公募のお知らせ

熊本大学教育学部で助教授の公募があります。要項は以下のとおりです。

1. 職種 助教授
2. 所属講座 教育学部理科教育講座
3. 担当分野 生物学 (動物学領域)
4. 担当科目: 学部「動物学」、「生態学」、「生物学実験」、「基礎生物学実験」、「理科 B」、「中等理科教育法 IV」など。大学院「生物学特論 I」、「生物学特論演習 I」、「理科授業研究」、「理科教材開発」など。
5. 応募資格等:
 - ・博士の学位を有する者。
 - ・大学院修士課程での研究指導及び講義担当可能な者。分類や形態、環境保全などにも基本的な知識や技能を有する者が望ましい。
 - ・採用時の年齢が 30 歳から 40 歳までの者が望ましい。【参考】本学定年は 65 歳である。
6. 応募書類
 - ・履歴書 (本学部所定の様式による) 1 通
 - ・研究業績一覧表 (本学部所定の様式による) 1 通 (但し、査読付き論文には 印を付すこと。また主要著書・論文等 5 編の概要各編 200 字以内を 1 通添付すること。)
 - ・研究業績等著書・論文等の現物、別刷またはコピー各 2 部
 - ・今後の研究・教育についての計画と抱負 2,000 字程度、様式は自由 1 通
 - ・写真 名刺大 1 葉
 - ・推薦状 1 通
 - ・応募者に関する所見を求めうる方 2 名の「氏名、所属、職名、連絡先住所、電話、電子メールアドレス」
 - ・送付先: 〒860-8555 熊本市黒髪 2 丁目 40 番 1 号 熊本大学教育学部長 石原 昌一 宛
- (注) 応募書類の封筒には「理科教育講座教員応募書類」と朱書きし、書留郵便で送付すること。履歴書 (所定の様式) 1 通
7. 応募締切日 平成 17 年 6 月 10 日 (金) 必着
8. 採用予定日 平成 18 年 1 月 1 日
9. 照会先
 - ・〒860-8555 熊本県黒髪 2 丁目 40 番 1 号 熊本大学教育学部理科教育 主任 正元 和盛
 - ・電話、ファックス 096 (342) 2531

日本分類学会連合の活動報告 VII

ニュースレター5号以降の活動

2004年

- 4月6日 第9回役員会(於:国立科学博物館分館)を開催.
 - 5月18日 第1回シンポジウム実行委員会(於:国立科学博物館分館)を開催.
 - 6月15日 「日本分類学会連合ニュースレター, No.5」を刊行. ホームページに掲載した.
 - 7月5日 第10回役員会, シンポジウム実行委員会(於:国立科学博物館分館)を開催.
 - 7月5日 第2回シンポジウム実行委員会(於:国立科学博物館分館)を開催.
 - 9月21日 第11回役員会(於:国立科学博物館分館)を開催.
 - 11月15日 平成17年度科研費研究成果公開促進費(データベース)を申請.
 - 11月15日 平成17年度科研費研究成果公開促進費「研究成果公开发表(B)」を申請.
 - 12月6日 「日本分類学会連合ニュースレター, No.6」を刊行. ホームページに掲載した.
 - 12月7日 第12回役員会(於:国立科学博物館分館)を開催.
 - 12月12日 第4回公開シンポジウム要旨集をホームページに掲載した.
 - 12月22日 日本学会会議会員候補者の推薦を行った.
- 2005年
- 1月8日 第4回総会(於:国立科学博物館分館)を開催.
 - 1月8日 第4回日本分類学会連合公開シンポジウム「種の違いをどのように見分けるか:生物を種の単位で見よう」を開催.
 - 4月25日 第13回役員会(於:国立科学博物館)を開催.

日本分類学会連合第13回役員会報告

分類連合の第13回役員会が2005年4月に開催されました. そのでの報告事項と審議・検討した事項を簡単に報告いたします.

日時: 2005年4月25日 15:00-16:35

場所: 国立科学博物館分館

出席者: 松浦啓一, 原 慶明, 佐々木猛智, 三中信宏

報告事項

(1) 科研費の申請結果(松浦)

来年の公開シンポジウムの開催経費獲得のために申請した平成17年度科学研究費補助金・研究成果公开发表(B)は不採択であった.

(2) 特定外来生物の指定についての意見書(松浦)

第4回総会において, オオクチバス・セイヨウオオマルハナバチの特定外来生物の指定について意見書を環境大臣宛に提出する案が承認された. しかし, オオクチバスについては指定が閣議決定されたため, 意見書は提出する必要がなくなった.

審議事項

(1) 連合の今後の活動について

今後, 連合として特色のある事業を展開するよう要

望があった. また, 再来年以降の公開シンポジウムも連合としての特徴を強調するべきであるとの意見が出された.

(2) 国際藻類学会議の共催

2009年8月に東京で開催される国際藻類学会議に連合が共催団体として参加することが承認された. ただし, 運営資金の拠出はしない. 会議には約850人の参加が見込まれている.

(3) 新役員案の検討

来年度以降の役員会の新体制についての案を検討した. 代表・副代表・庶務・会計・データベース・ウェブ・ニュースレター・メーリングリスト・会計監査の各役員の候補者に打診し, 新役員案を決定することになった.

(4) シンポジウム開催案

来年1月のシンポジウムの開催案およびシンポジウム実行委員の案を決定した. シンポジウムは2日開催し, 初日は「ミドリムシは動物? それとも植物?: 原生生物の不思議な世界」のタイトルで開催される. 2日目のタイトルは未定である. 初日の演者は5名, シンポジウム実行委員は5名の予定である.

日本分類学会連合ホームページ

日本分類学会連合では, ホームページを開設しております(<http://www.bunrui.info>). 各加盟学会のホームページとのリンクや日本国内のタイプ標本データベース・日本生物種数調査の結果・掲示板など, コンテンツも次第に充実しつつあります. ニュースレターも含めて連合の活動を随時掲載してまいりますので, 連合・加盟学会の活動状況を随時ご確認ください.

TAXA 生物分類学メーリングリスト

日本分類学会連合が運営するメーリングリスト TAXA は, 生物分類学に関する情報交換や討論をするためのメーリングリストで, 生物分類学に関心をもつすべての方に開放されています. TAXA メーリングリストは下記の趣旨により開設されました:

日本分類学会連合は, 「生物の分類学全般にかかわる研究および教育を推進し, 我が国におけるこの分野の普及と発展に寄与することを目的(規約第2条)」として, 2002年1月12日に設立されました. 現在, 分類学に関係の深い27の学会が加盟しています. その後, 本連合はこの目的に向かって様々な活動を展開してきましたが, このたび新たな事業として「メーリングリスト TAXA」を開設することになりました. このリストの趣旨は, 本連合からの広報のほかに, 登録会員が互いに分類学に関する情報交換や討論をするための場を提供することにあります. したがって, このリストは本連合の加盟学会の会員ばかりでなく, 分類学に関心をもつすべての方に開放されます. なお, リストへの登録など管理, 運営は本連合の担当者が行いますが, 投稿は登録会員なら誰でも自由に行えます. 多くの方が登録くださいますようご案内申し上げます.

2003年12月21日
日本分類学会連合
代表: 加藤雅啓

TAXA は2003年12月13日に開設され、2003年12月24日午後5時に稼働開始しました。2005年5月19日の時点で【718】名の会員が登録されています。入会を希望される方は、

- 1) メールアドレス
- 2) 氏名(日本語表記ならびにローマ字表記)
- 3) 所属

を明記の上、TAXA 運営担当の三中信宏 (taxa-admin@ml.affrc.go.jp) までご連絡ください。

[編集後記]

編集者の怠慢のため発行が遅れておりました分類連合ニュースレター第7号でございますが、この度やっと皆様にお届けできる運びとなりました。これもひとえに加盟学会会員の皆様方の方々の温かいご協力の賜物でございます。

これまで分類連合ニュースレターでは偶数号で加盟学会の紹介、奇数号ではそれに加えシンポジウムの紹介を主に行ってまいりましたが、この他にも随時加盟学会員の皆様から広くご寄稿を募集しております。

原稿は柁原宛 (kazi@sci.hokudai.ac.jp) に電子メールでお送りください。電子メールが使用できない場合はFAX (011-746-0862)もしくは郵送(〒060-0810 北海道大学大学院理学研究科生物科学専攻)でお送りいただいてもかまいません。皆様からの多数のご寄稿をお待ち申し上げております。

(ニュースレター編集担当:柁原 宏)

日本分類学会連合ニュースレター 第7号

2005年6月8日発行

発行者 日本分類学会連合

事務局 〒169-0073 東京都新宿区百人町 3-23-1

国立科学博物館

編集者 柁原 宏
